



みかんの始祖 伊藤孫右衛門

～伝説からみる本市かんきつ栽培の起源～



有田公園内に立つ 伊藤孫右衛門の顕彰碑

みかんが黄金色に輝く季節となりました。

糸我町にある有田公園に登っていくと、その頂上には、ひっそりとみかんの始祖、伊藤孫右衛門の顕彰碑がそびえています。

顕彰碑に刻まれた伊藤孫右衛門とは、どのような人で、みかんの始祖と呼ばれる理由は何なのでしょう。

孫右衛門ってどんな人？

伊藤孫右衛門は、今からおよそ500年前の三五四三年、糸我庄中番村の裕福な農家に生まれました。彼は非常に殖産に熱心な青年でした。

「我が糸我の里は、山腹が広く丘陵に富んでいる。これを畑に開墾して適当な果樹を植えたならば、必ず人々の暮らしが楽になるに違いない」と考え、山林を開墾し、いろいろな果樹を植えて、研究していました。

みかんに会おう

そんな中、孫右衛門は、命ぜられて肥後の国へ行くことになりました。肥後の国にはみかんという果物があつて、多額の収益をあげていることを聞いていた孫右衛門。この機会にみかんの苗木を持ち帰り、里に繁殖させて人々の幸せを図ろうと考え、上司にこのことを相談しました。上司はその志にたく感激しましたが、この時代、他藩との通商貿易を厳禁されている中で、みかんの苗木を持ち出すのは簡単ではありませんでした。そこで上司はみかんの株を分けてもらえるよう「盆栽として楽しみたいので、孫右衛門に与えてくださいませんか」と巧みな手紙を書きました。孫右衛門はその手紙を親しくなった役人に見せることで、夢にまで見た苗木を一株手に入れることができました。



孫右衛門が持ち帰ったとされる原木が今も糸我の地に残っている。 ※現在は5代目

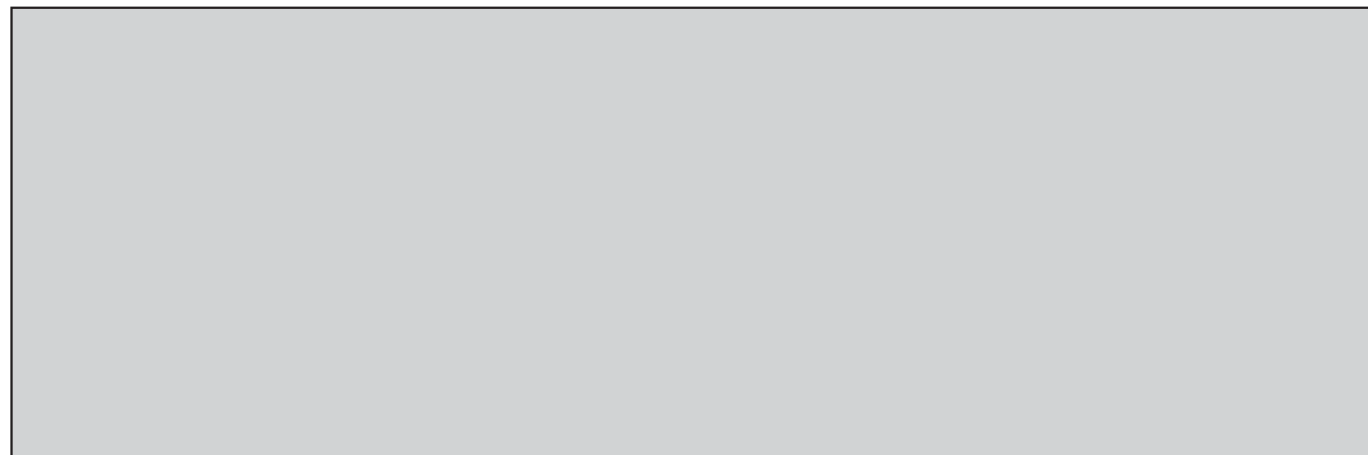
みかんの有田の地へ

みかんの株が枯れないうちに急いで帰らねばなりません。しかし、世は戦国時代。戦の絶えない諸国を通り、数十日を要する旅路は想像以上の苦勞を伴いました。拝みたいような気持ちでようやく和歌山へたどり着いた時、みかんの株はかなり衰えていました。一株のうち、ひとつを上司の庭園に植え、もうひとつを孫右衛門の家の近くの畑に植えました。上司の庭園に植えた苗木はまもなく枯死してしまいました。孫右衛門の苗木は丹精に手入れをしたおかげで、すくすくと成長し、数年後に香り高い黄金色の実を結びました。これが噂で広がり、接穂してほしいという人は喜んで与えていました。ところが、有田の地にとんだんみかん栽培が広まってきました。

人々の幸せを考え、奔走した孫右衛門の行動が、現在の有田みかんの礎を築いたのです。

※本市のかんきつ栽培の起源については諸説あります。

広告



このコーナーは、地域の課題解決について研究している龍谷大学政策学部の学生の皆さんが取材しました。有田市でのフィールドワークなどでの活動を通じて感じた“縁側”の魅力を多くの人に伝えるため、学生自ら取材を行い、記事を書いています。今回は、市内の小・中学校で英語教育をサポートしてくれているATLのマイケルさんにお話を伺いました。(ALTとは、外国語を母国語とする外国語指導助手をいいます。)*ここでの“縁側”とは、“ホッとできる自分の居場所”という意味です。



マイケル・デリエンゾさん 野 在住

母国にも勝る有田への想い

マイケルさんはアメリカのネブラスカ州出身で、父親の影響で子どもの頃から日本の文化に興味を持ち、兵庫県の1年間の留学を経てALTとなった。そこから有田市での生活が始まった。母国と比べて有田市は多くの自然に囲まれており、市民の方々も快く受け入れてくれ、友達作りには苦労しなかった。みかんの収穫時期になると周りの方々が沢山お裾分けしてくれるため、自分でみかんを買ったことがないらしく、ここでも市民の優しさが身に沁みたといい、ほっこりしたエピソードも聞かせていただいた。

毎日充実した日々を送っていたところ、2年前同僚に誘われて、須佐神社で毎年行われる千田祭りに参加した。祭りの衣装を身にまとい神社から



須佐神社

千田漁港までお神輿を担ぎ、港に着くと二斉にそのお神輿を投げ落とすという事に衝撃を受けたそう。新顔で当日挑んだが、そんなことを忘れてしまいうぐらい地元の方々も打ち解けることが出来たと嬉しそうに当時の写真を見せてくれた。

また、毎日のように夜道を散歩しており、ライトアップされる須佐神社の鳥居を目的地とすることが多い。こうして、今ではマイケルさんにとって須佐神社は楽しい思い出が詰まった縁側となっている。

今年でALTとしての仕事に一区切りをつけるマイケルさんだが、有田市に住み続けたいと



千田祭りでのマイケルさん(中央)

取材を終えて・・・



私たちが神社を散策

丁寧インタビューに答えていただいたうちに、マイケルさんの笑顔は私たちの緊張をほぐしてくれました。有田市での5年間の思い出の深さ、有田市への熱い思いに、同伴してくれた市職員の方も、笑みがこぼれていました。気さくなマイケルさんの貴重な体験談を聞くことが出来、もつと多くの市民の方に有田市での自慢できる縁側を見つけていただきたーと思えました。



手前から 華乃菜、雪新、尾田、猪田、宮田

広告

